# 研究・調査報告書

| 分類番号 | | 報告書番号 | 担当 |
|---|---|---|---|
| A-152 | | 13-061 | 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 |

**題名（原題／訳）**

Cross-sectional and longitudinal associations of lifestyle factors with depressive symptoms in ≥ 53-year old Taiwanese - results of an 8-year cohort study.
台湾における 53 歳以上の高齢者のうつ症状と生活習慣の要因との横断的または縦断的関連―8 年間のコホート研究の結果

**執筆者**

Tsai AC, Chi SH, Wang JY.

**掲載誌**

Prev Med. 2013 Aug;57(2):92-7. doi: 10.1016/j.ypmed.2013.04.021. Epub 2013 May 4.

| キーワード | PMID |
|---|---|
| うつ症状、生活習慣、喫煙、飲酒、ビンロウジュ噛み（キンマ噛み）、茶を飲むこと、身体活動、高齢者 | 23651861 |

**要　旨**

**目的：**
本研究の目的は、台湾の高齢者のうつ症状と生活習慣との横断的または縦断的関連を検討することである。
**方法：**
本研究は、ベースライン（1999 年）時に 50 歳以上であった台湾の 4,122 人（男性 2,193 人，53.2%；女性 1,929 人，46.8%）のうつ症状の併発及び 8 年後の新たなうつ症状発症と、生活習慣との関連を検討するために台湾の加齢に関する縦断研究（TLSA）のデータセットを分析した。アウトカムは、CED-D10 の簡易版によるうつ症状の発症とし、喫煙、飲酒、ビンロウジュ噛み（嗜好品）、茶を飲むこと、身体活動などの生活習慣との関連を多変量ロジステック回帰分析を用いて検討した。
**結果：**
多量の飲酒や問題のある飲酒は、うつ症状の併発（オッズ比=1.85, 95%信頼区間=1.02-3.36）との関連を増大させた。反対に、茶を飲むこと（オッズ比=0.63, 95%信頼区間=0.50-0.79）と身体活動（オッズ比=0.59, 95%信頼区間=0.48-0.71）は、その関連を低下させた。一方で、喫煙とビンロウジュ噛みは、有意な関連を示さなかった。喫煙は、8 年後にうつ症状の発症を増加させた。（オッズ比=1.56, 95%信頼区間=1.06-2.30）過去の喫煙と、現在のビンロウジュ噛みも、同様の傾向を示した（オッズ比=1.47, 95%信頼区間=0.93-2.31）。1 週間に 3 回以上の運動は、その発症を減じたが（オッズ比=0.77, 95%信頼区間=0.60-0.99）、飲酒では全く関連がみられなかった。
**結論：**
生活習慣は、台湾の高齢者の精神的健康に影響を与えうる。高齢者のうつ症状のリスクを減らす介入には、こうした修正可能なリスクファクターを改善することを目指した戦略を含めるべきである。